

●巻頭特集 クラシックカーファンを魅了するワクイミュージアム

古き良き車を

次代へ伝える場所

土日だけ開館する、クラシックカーの博物館が加須市にある。ロールス・ロイスとベントレーを集めたワクイミュージアムは、名車をすべてレストアし、動態保存した状態で公開する。館長の涌井清春さんに、ミュージアムを通して伝えたい思いを聞いた。

貴重な車を集めた 愛好家たちの交流の場

東北自動車道加須インターチェンジの南側に位置する、加須流通団地。週末、この一角に、都内や遠方のナンバープレートが付けた高級車が集まってくる。目当ては、2007年に開館したワクイミュージアムだ。

館長の涌井清春さんは、都内で30年以上にわたり、ロールス・ロイスの輸入販売業を営んできた。その傍らでコレクションしたクラシックカーを、ここ加須市で無料公開している。展示はもちろんロールス・ロイスが中心だが、ロールス・ロイス社が買収した



ワクイミュージアム 館長 涌井清春さん

ベントレー社の車もある。古いだけでなく、吉田茂元首相の愛車だったロールス・ロイスや、白洲次郎が英国留学時に乗っていたベントレーなど、歴史的価値を持つものも少なくない。人気は、フランスのル・マン24時間レースで優勝したベントレーだ。陳列されているのは、1927年から4連勝したときの1台。併設の展示室には、その年の優勝トロフィーも飾

務し、趣味でオートバイをコレクションしていた涌井さん。仕事でも私生活でも、美しく精緻で、考え抜かれたデザインの製品に触れる機会が多かった。メルセデス・ベンツもボルシェも好きだと笑うが、それでもロールス・ロイスに惹かれる理由がある。「それは温もりを感じるからです」

なぜ世界中の車で、ロールス・ロイスが最高級品の代名詞なのだろうと思ったのが、最初のきっかけだった。仕事柄、さまざまな製品のブランド性や戦略に興味があったのだ。

ロールス・ロイス社は、1906年にイギリスで、ロールドとロイスという2人の若者が設立。最初は、航空機用エンジンや乗用自動車を製造していた。同社で製造と技術を引き受けていたロイスは完璧主義で知られ、品質にこだわるあまり、ネジ一本たりとも社外に発注しなかったという逸話がある。

「ロイスが心血を注いで作った車を運転すると、彼が何を考え、どんな人間だったのかが分かる気がするのです」
ただの乗り物とは言い切れない、人間性と温かみを持つ車。それが涌井さんにとっての、ロールス・ロイスの魅力だ。



▶ロールス・ロイスを象徴する、ボンネットの先端を飾る女神像。ひざまずいた姿のものもある

られている。

ほかに、オリジナルボディータを持つ世界最古のベントレーなど、貴重な車が20台以上。いずれも、触れそうなほど近くまで寄って、じっくり眺められる。同館がクラシックカーファンに限らず人気があるのも、うなずける。

来館者には常連も多く、名車の前に用意されたテーブルで、しばし歓談する姿がみられる。1日に40人ほどが訪れることは、車をこよなく愛する人々の社交場でもある。

人間性と温かみを感じる ロールス・ロイスの魅力

前職は大手時計メーカーに勤した。命名は、遺産・継承物を意味する言葉から。ファクトリーは、クラシックカー専門のレストア工場だ。ミュージアムで公開している車もここでレストアをし、どんなに古くても、すぐに運転できる状態を保っている。

車は消耗品ではなく、継承すべき文化遺産。日本ではまだ、馴染みの薄い考え方が、それを根付かせる担い手として名乗りを上げた涌井さんの志が、3つ施設を作り上げた。

「ブランドとは、人の考えや志、愛情、魂などが形になって残り続けたものだと思います」
ロイスの思いだけでなく、涌井さんの情熱もまた、クラシックカーと共に受け継がれていくのだ。

3つの施設で支える 車を継承する文化

ワクイミュージアムのそばには、「ヘリテージ」と「ファクトリー」という施設がある。

ヘリテージは、クラシックカーを展示販売するショールームだ。涌井さんが販売した車がオーナーの手を離れるとき、次のオーナーを待つ場所として用意



▲ミュージアムに併設された展示室には、名車にまつわる品が展示されている。白洲次郎が着用したスーツと、1928年のル・マン優勝時のトロフィー



▲同好の士と語り合う来館者たち。遠方から来る人もいるが、「ドライブを楽しみながら来た」と話すのは、さすが車好きならではの



ワクイミュージアム
加須市大森2-21-1
☎0480-65-6847
◎開館日/土・日のみ ◎開館時間/11:00~16:00